対人魅力と性格の類似性との関係

○梶原直樹¹・梶原和子²

(¹日本女子大学・²下野市立祇園小学校)

キーワード: 対人魅力, 性格, 類似性

The relations between interpersonal attraction and similarity of personality

Naoki KAJIHARA¹, Kazuko KAJIHARA²

(¹Japan Women's University, ²Gion Elementary School)

Key words: interpersonal attraction, personality, similarity.

目 的

他者の魅力を評価するときに、態度や性格の類似性を独立変数にすると、類似度が高まるほど、魅力も高くなることが示されている (Byrne & Nelson, 1965; Byrne, Ervin, & Lamberth, 1970)。しかしそれは、われわれが実際に好きな人との類似度が高く、嫌いな人とは低いことを意味するわけではない。

そこで、梶原・梶原 (2011) は、自分が実際に好きな人、嫌いな人、そして自分自身の三者の性格の評価から、そのようなことがいえるのかどうかを調べた。三者に対しては、主要 5 因子についての 5 段階評価と、さらに自分自身については、主要 5 因子性格検査を行った。その結果、5 段階評価の比較では、自分の性格が好きな人よりになったが、性格検査を基準にすると、そうとはいえないという結果になった。さらに、自分自身については、5 段階評価と性格検査で異なる結果になった。そこで、本研究では、5 段階評価と性格検査をそれぞれ三者について行い、それらを比較した。

方 法

調査対象者 27 歳から 73 歳の通信制大学生 27 名を対象とした (女性 23 名, 男性 4 名)。平均年齢は, 44.8 歳 (SD=11.4 歳) であった。

調査内容 性格検査としては、村上・村上 (1999) による主要 5 因子性格検査を用いた。5 段階評価では、主要 5 因子である外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性を評価項目とした。外向性は、内向的と外向的、協調性は、冷たいと暖かい、勤勉性は、怠惰と勤勉、情緒安定性は、神経質と気楽、知性は、浅はかと思慮深い、を両端として 5 段階に区切り、評価スコアを、左から右へ 1 点から 5 点とした。

手続き はじめに主要 5 因子の説明をしたあと、その 5 項目について、対象者の同性で好きな人と嫌いな人、そして自分自身のそれぞれの性格を 5 段階で評価するように求めた。そのあと、対象者自身により、それら三者についての主要 5 因子性格検査を行った。半数は、好き、嫌い、自分の順で、もう半数は、嫌い、好き、自分の順で評価した。

結 果

5 段階評価と主要 5 因子性格検査のそれぞれで、評価対象ごとに、5 項目の合計点を求めた。表 1 は、各評価対象のスコアの合計点の平均値と標準偏差を示している。表中では、5 段階評価によるものを主観的、性格検査によるものを客観的、とした。この平均値について、3 (評価対象) × 2 (評価方法) の 2 要因の分散分析を行ったところ、評価対象の主効果のみが有意であった ($F(2, 52)=45.2, p<.001$)。評価対象ごとのスコアの平均値について、LSD 法による多重比較を行った結果、各対象のスコアの大小関係は、好き > 自分 > 嫌い、であった ($MSe=16.4, 5\%$ 水準)。

表1 各対象の評価スコアの平均値と標準偏差 (n=27)

評価方法	好き		嫌い		自分	
	M	SD	M	SD	M	SD
主観的	20.2	3.2	12.6	2.7	17.1	3.5
客観的	19.4	3.1	12.4	2.5	17.3	3.4
平均	19.8	3.2	12.5	2.6	17.2	3.5

次に、各対象間の差異の大きさを求めるため、評価対象ごとに、5 項目のそれぞれでスコアの差の絶対値を算出し、それらを合計した (表 2)。この値について、3 (評価対象間) × 2 (評価方法) の 2 要因の分散分析を行ったところ、評価対象間のちがいの主効果のみが有意であった ($F(2, 52)=18.6, p<.001$)。そこで、評価対象間のスコアのずれの平均値について、LSD 法による多重比較を行った結果、ずれの大小関係は、 $|好き - 嫌い| = |嫌い - 自分| > |好き - 自分|$ 、であった ($MSe=13.4, 5\%$ 水準)。

表2 各対象間の評価スコアのずれの平均値と標準偏差 (n=27)

評価方法	好き - 嫌い		好き - 自分		嫌い - 自分	
	M	SD	M	SD	M	SD
主観的	9.4	3.0	4.8	3.5	7.8	2.8
客観的	8.9	3.0	5.3	2.8	8.6	3.1
平均	9.1	3.0	5.0	3.2	8.2	3.0

考 察

評価スコアから、自分自身は、好きな人と嫌いな人との間に位置するという結果になったが、評価方法によるちがいは見られなかった。また、対象間のずれについては、好きな人と自分の方が、嫌いな人と自分よりも小さくなった。こちらも、評価方法によるちがいは見られなかった。

これらの結果から、たしかに、自分が、嫌いな人よりも、好きな人よりも評価されているといえる。しかし、そもそもの評価スコアで三者の間に違いがあるため、自分と好きな人との類似度が高いと積極的にいえるものではなかった。それよりはむしろ、評価スコアからも、評価スコアのずれからも、自分と嫌いな人との類似度は低い、ともいえるような、非類似性が強調される結果になった。原因としては、対象者自身のみによる性格の評価であったことと、好きな人との類似性が、主観的なものであるにすぎないことが考えられる。

引用文献

- Byrne, D., Ervin, C. R., & Lamberth, J. (1970). Continuity between the experimental study of attraction and "real life" computer dating. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 157-165.
- Byrne, D. & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- 梶原直樹・梶原和子 (2011). 対人好悪と性格の一致度との関係 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 97.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1999). 性格は 5 次元だった 培風館